



自費出版雑誌

from 京都 /

『NEKKO』 創刊!!

特集 選挙をやってみた。



定価 1,100円 (税込 1,210円)

市民が作る自費出版雑誌『NEKKO』は京都市内で暮らす女性5人で作っています。創刊号は自分たちで挑戦(そして落選!)した京都市議員選挙の詳細特集です。

これから市民選挙をやろうという方々にも、はたまた選挙なんかには行かないよ、って方にも、たくさんの方に読んでいただきたいと願って作りました。

選挙も民主主義もこの国では問題だらけだけれど、だからこそ、普通の市民がずんずん入って行って変えていけたらと思っています。

市民が作る政治リトルプレスは街を歩き、たくさんの方の声を聞きながら、息長く続けていきたいと思っています。(NEKKO編集部)



▶『NEKKO』のご購入、または店舗にてのお取り扱いについては、名前(店舗名)、住所(郵便番号から)、電話番号、メールアドレス、希望冊数をご明記の上、以下のアドレスにご連絡をお願いします。読んだ感想もぜひお送りください。

nekkomagazine@gmail.com



何度も洗ってつかえるエコラップ

ミツロウラップ 販売中!!



オーガニックコットンの生地にミツロウ(たまばん@信楽のニホンミツバチのミツロウ、オーガニックミツロウ)とオーガニックココナッツオイルと松ヤニをいい塩梅にブレンドして、あまいる探偵団が手づくりしています。(監修 Biwabochi ちまり)



Sサイズ 13x13cm 500円

(半分に切ったリンゴなどに)

Mサイズ 20x20cm 800円

(お皿に残ったおかずなどに)

Lサイズ 26x26cm 1000円

(サンドイッチやおにぎりなどに)



あまいるだより(天色便り)第42号

編集/あまいる探偵団

(北岡七夏・志葉未来・中野和子・藤井朋子・森優子)

表紙タイトルロゴ/岸田和之

発行日/2020年9月15日

発行/特定非営利活動法人あまいるびわ湖

~大切なことを他人まかせにしない、自分たちで力をあわせてつくる~

TEL 0748-46-4551 FAX 46-4550

Eメール info@aoibiwako.org

ブログ http://aoibiwako.shiga-saku.net/

びわ湖の森を元気にするkikitoペーパーを

使用しています(びわ湖の森の間伐材活用)

畑、やっています

新型コロナウイルスの出現で、私たちが取り巻く環境は大きく変わりました。まだ続きそうな手探りの日々。

自分たちの手で食べるものを育て、

それぞれの場所で、

それぞれの方法で、

豊かな循環をつくりだそうとしている人たち。

アトリエの畑を任せられた亜紗子さん。

ニワトリも飼い始めたときこさん。

医師でありながらセミプロ百姓の松本さん。

共同菜園にコンポストを作りたい志野舞さん。

そんな4人のお話を聞いてきました。

お話しを伺ったみなさん

泉亜紗子さん

草津市在住。仕事はグラフィックデザイナー・イラストレーター・絵描き。一児の母。畑の広さは約1a。好きな食べ物は牡蠣と桜餅。



中谷志野舞さん

東近江市在住。生ごみコンポストを通じて市民活動始める。一児の母。畑の広さは約2a。好きな食べ物はジャガイモ。



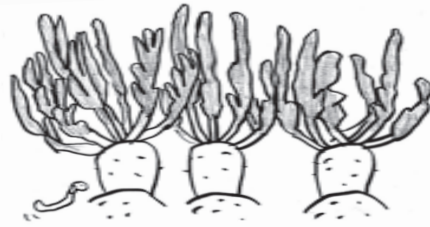
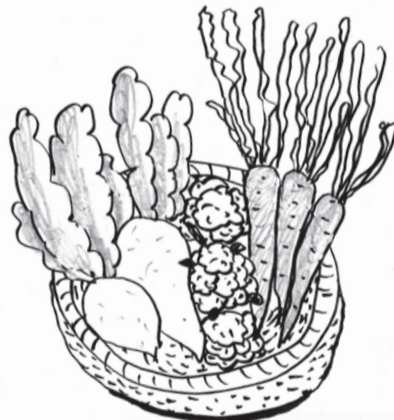
新田ときこさん

湖南市在住。家族で食べるパンを焼いて約10年。お腹が膨れることが好き。四児の母。畑の広さは約1a。好きな食べ物を聞かれて、一晩悩んだけどひとつには決められません。



松本繁世さん

東近江市在住。医師。「共に暮らし 共に生きる」をモットーに養生農園にて米や野菜を作る暮らしを実践中。畑は10aが2つと15aが3つ。田んぼは40a。好きな食べ物は野生の鹿、猪カレー。



※畑の広さ 1a(アール)=10m×10m

読書会に選んだ本
『わたしのテロル』
ブレイディ・ミカコ著
岩波書店 二〇一九年



森優子(あまいる以下森) 今日私は私、来るところかと思つたぐらい、全然この本の魅力がわからなかった。ブレイディ・ミカコさんの文章が苦手なせいもあるけど、特に金子文子さんの魅力が。なんか両親のことをめっちゃくちゃ言ってるけど自分もおんなじじゃない？って。好きな男の人のところあつち行つたりこつち行つたり。で、あかんくなつたらおじさんのところに戻ってきて女中奉公して。最後に朴烈(朝鮮の社会運動家。無政府主義者。金子文子の内縁の夫)の家族にお手紙書いて「あなたのお墓にお墓に入れてください」って、そこで家父長制肯定するんやとか。「私は私自身を生きる」とか、他の人には強要しないとか、生き方として共感できる部分もあるんやけど。



イングリッドのエミリー・デイヴィソンは、百年も前に家庭における女性の家事の価値をもっと認めるべきやとか、女性と男性の同一賃金とか言ってるのはすげーなと思つた。日本もイングリッドと同じ時期に女性解放運動がありましたよね、一九一〇年代頃かな。アイルランドの独立蜂起と文子が出会つた朝鮮独立万歳の三・一運動もおんなじ頃やなと思つて。



河かおる(以下河) それはそう、すごい大事だと思ひます。同時代の国を越えた、アイルランドと朝鮮の出来事とか日本の状況とかをリンクさせるような書き方をしてくれてたらもっと良かったのになつて私も思ひました。アイルランドでイースター蜂起が起きて、それが失敗に終わって、主導者たちがバンバン銃殺されたことでアイルランドのナショナルリズムに火がついた。その後、独立運動が盛り上がり、最終的には自治を認めるころまでは行つたのが、ちょうど一九一〇年代の後半から二十年代の前半にかけてです。日本で関東大震災が起きたのは一九二三年、アイルランドの自治が一応一段落した直後なんですよ。で、



当時日本政府の中核の人たちは、このアイルランド独立運動が朝鮮にも飛び火することを警戒して、結構ピリピリしながら見てたと思ひます。それで、震災時の人々の不安のはけ口、朝鮮人が井戸に毒を入れたとかのデマを流す。でもそこから始まつた虐殺が思いのほかエスカレートしちゃうって、慌てて火消しをするんだけど。でも朝鮮人が本当に暴動を起こそうとしてたんだっていう証拠が欲しいから、朴烈を首謀者に仕立て上げて、大逆罪で死刑判決にする。そういう背景があつたと思ひます。ただ、アイルランドの時みたいに、処刑してしまふと英雄になつて、それで民族主義が盛り上がる、というのを多分みてて、死刑判決を出した後に恩赦にする、てなつたんじゃないかな。

死ぬと生きるの間に

中野和子(あまいる以下中) 私が印象的だつたのは、金子文子は最後刑務所内で死ぬじゃないですか。でも朴烈は、転向して戦後になつてからだけど刑務所から生還するでしょ。それ読んで「こいつー！」って思つた。あの頃、他の政治犯もみんな転向してたらいいんだけど。でも、よくよく考えてみたら、金子文子にしてみたら、朴がどうであろうと、彼女は死を選んだらうとは思つた。



河 その死ぬ、生きるの話で言つと、ここに出てくる三人の中で生きのびたのは、アイルランド独立運動のマーガレット・スキニダーだけなんです。無理やりかもしれないけど、被植民地の人間は死んでないな、と。『PATCHY LOVE & PEACE』(井筒監督、二〇〇七) 観ましたか？七十年代が舞台なんですけど、そこはとにかく生きるっていうのがテーマ。一方で、戦時中とか、支配する日本側には死ぬことに美とか意味を求めたいな所があるんだけど、それと対照的にどんなに恥ずかしくても惨めでも逃げてでも絶対生きるみたいなの執着を、植民地支配下の朝鮮と七十年代の日本とを交差しながら主人公の在日朝鮮人一家のライフヒストリーを通じて描いてる映画、それを思ひ出しました。

植民地にされた側の人間の「絶対に生きてやる」みたいな感じ、朴烈は死ななかつたことをあえて弁護するすべね。で、金子文子が何で死んじゃつたのか実は真相はよくわかつていなくて、エミリーも競馬場で飛び込んで馬にぶつかつて死んだって話ですよ。マーガレットは銃撃を受けたけど九死に一生を得て、七十年代まで生きてた人なんです。でも、死にしか意味が見出せないみたいなところが共通してあるのかもしれない、って考えながら読んでました。

志宣未来(あまいる以下志) 私は、この本を最初に読んだ時、本の調子に乗つてすごい勢いよく読めた。自分の中に持つてるアナキズムに火がついてしまつて、すごい鼓舞されてしまつたんですよ(笑)。その時の自分の状態も影響してたと思うんやけど。

北岡七夏(あまいる以下北) 「思想を身体で読む」って表現もあつたよね。志 でも、エミリーとかの暴力に訴えて何か変化をどうしようって対しては共感を持ってなくつて。

河 今回の時代に、テロル、暴力しか手段がなかつた女たちを呼び戻して本にして、何が伝えたかったのかな？っていうのは考えました。結局それが手段がないからテロに行くわけなので。とはいへ今、そこから学ぼうっていうのもなかなか難しい。でもなんか、あんまりにも話通じなさ過ぎるときに、「これテロ起こすしかない」みたいな気持ちになることないですか(笑)。

藤井朋子(あまいる以下藤) あるある！森 エーもう今日は晩ご飯作らへんし！とくらいやけど。北 でもこういう歴史があつたことを知つてることが大事なんかもしれんね。

私は私自身を生きる

北 私も、金子文子さんが朴烈に「私は朝鮮人でありませぬから、朝鮮人のように日本に圧迫されたことがないのよ」もしあなたが民族運動者ならおんなじ気持ちにはなれない(P.100)、って言うところは印象に残つた。私の暮らしの中にもわかつてるつもりになつてることがいっぱいあつて、それにはとて気がつくときがある。そこまでは自分のこととして思つてなかつた。だからそこに心打たれました。

河 日本の女性参政権運動を熱心に行つた人たちの植民地に対する認識は、帝国の女性の権利を言いながらも、植民地のことは気にしてないっていう人が大半だつたんですよ。

よ。その中で、金子文子のこの感覚は傑出してると、私も思ひました。自分はいくまで朝鮮人ではない、帝国の側の人間だし、立場性の違いっていうのをわかつた上で行動してた。すぐに抑圧されてる同じ立場に立てるって思つてしまいがちなことってあるんだだけ、中 そういう人いるよね。

森 今の聞いて、ちょっと金子文子のこ受け入れよかなという気持ちになつた。北 やっぱ個人主義っていうところをすごい徹底しようとして。それで今の時代でもまだ言えないようなことも、すごく考へて言つたり行動してたり。

中 そうなんだよね。誰からも自由だつたんだよね、きつと。公判の初日になつてこれまでの証言をひるがえして「実は爆弾を入手する話については知らなかつた」って言ったじゃん。「内面的な事情からその犠牲になろうとしてる」(P.188)てくだり。二十七日の公判で文子が朗読した文章を読んでも、文子がずっと自問自答してたのがよくわかる。どこまでも自分に正直な人なんだな。

北 私は私である、今、自分は何を考へているのか、に従う、頭の及ぶ限り疑いながら。愛すらも疑つて。志 それだけこの人のほんまに体験に立つて揺るがない、自分は自分であるっていうその思いがすごいなつて思つた。

体験に根をはり育てる思想

中 この時代に天皇がただの人間だつて言つてる。それもすげーよね。藤 自然との対比の中で人間の存在を考へるっていうところ(P.163)が出てくるでしょ。金子文子自身がこういう風に人間を見るようになったのはなんでやろうって。若い頃に自殺しかけた時にも、頭上できなくセミの声にはとて自分を取り巻く自然の美しさに驚いて自殺をやめたつていうくだりがある。自然を見わたして、「生物種として人間を見たときに、人間だけが人の上に人を置いたりして不平等を作り出しておかしいって思ふ。そこも面白いな。」

中 そうそう、天皇を見たら普通の人間だと。動物はただ生きて死ぬだけ、何が違ふのか。志 自然の循環の世界を見渡して色んなこと感じた人が、人間界を見たらものす

ごい矛盾があることがはっきりと見えるつていうか。

北 だからやっぱり自分の体験をもとにいろんなこと考へて、下から積み上げていって。一人の女の人がこの時代に、生きて死ぬだけやんかかって思ひ至れるっていうのはすごいな。て。何かの思想に則つてるんじゃないかと、ミクロとマクロの視点を行き来しながら物事を見て、自分なりの思想を積み上げていってるところに、ブレイディさんは共感してはるんかな。

藤 そうやって社会を眺めてみた時に、人間の不平等って人間自身が作り出したシステムの中で作られてるだけじゃないかって気付く感じがあるのかな。そしたら、変えることもできるつて方向に。

河 この本にも書いてあつたけど、なんで朴烈と金子文子がずっと拘留されたつたのか、当時の法律に照らしても何の根拠もない。しかも、実行もしてないのに大逆罪で死刑にするっていうのは、当時の法体系の中でも相当無理筋だつたんですよ。朴烈はともかく金子文子まで。しかもまだ治安維持法がない時やし。でも金子文子はその無理筋をあえて受け入れる。受け入れるつてわけじゃないけど、ほら国家つてこんなデタラメするでしょ？みたいなことを、自分が裁判を受けることを通じてどんどん明らかにしていく、つてことをしたつたのかな。

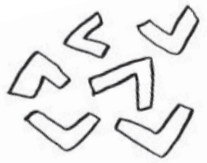
エミリーも今あるシステムを壊すためには、まずそこに入つて行つてそれがいかに何の合理性もないこと、いかに矛盾に満ちたものかを見せつける。この当時の国家のパカさ加減があまり出されてる。国家が一番アナキーだつたつていうこと。

中 後に金子文子を発掘して世に出した山田昭二さんが、一九九三年に、文子が獄死した宇都宮刑務所に文子関連の資料の閲覧を請求したけど、見せてもらえなかつた。さらにその二年後にもう一度請求したら、今度は「五十年以上経つた資料は廃棄した」つて言われる。二年前にはそんなこと言わなかつたのに。これを読んで日本は何も変わつてないな、つて思つた。

河 今もまだ変わらない、国家が一番アナキーだつて、通じる問題もたくさんあるよね。

こんな調子でわたしが今年読みきつた本は、50冊ほど。多いとは言えないと思ひます。本が好きかと訊かれると返答に困りますし、本について詳しいわけではありません。ただ、子どもの頃から本にたすけられてきたし、本のためになる仕事をしていたいんだと思ひます。だから、誰かが読んだ本を掃除して、修理して、カバーを補強したりして、また読めるようにします。地道で、意外と重労働で、さほど儲かりもせず、はたから見れば無駄と思へるようなことも多いみたいだし、「なんでそんな仕事をしているのか」と訊かれてもうまくこたえられないし、誰にでも理解される訳ではない仕事ですが、本のおかげで暮らしているということはわたしの唯一の誇りであり、満足して生活しています。

値段をつけたり、粛々と本の仕事をします。そんな仕事をしながら、ときどき店を訪れてくれる知人やお客さんと話したりしていると、1日はゆっくり終わっていきます。常連と言えるようなお客さんは何人かおられますが、そんなお客さんとお話することはそう多くありません。ほとんどの方は無口で、本の背表紙とじっくり対話し、ときどき棚から本を抜き出して開き、やがて何冊かの本を帳場に持ってきてくださいます。そんな、名前も知らないお客さん方の存在に、なによりも励まされます。営業時間が終わると、残業したりしなかつたりして、帰宅して、晩ごはんをつくりながらお酒を飲み、お風呂に入って布団にもぐりこみます。そして枕元に置いてある本を開いて、多ければ数10ページ、少なければ数行だけ読んで、眠ります。



暮らしのコラム
本と生活

みこしば やすこ
御子 柴 泰子 半月舎

朝、目が覚めると、窓を振り返ります。自宅の窓の半分は、本が詰まつた段ボール箱で隠れています。目を凝らして、カーテンの隙間から青空が見えた日は、だいたい布団を干します。洗濯をして、朝ごはんをつくって食べて、そうじをして、時間があれば本を少し読んで、出勤します。わたしの仕事は古本屋です。正午に店を開け、夕方6時頃閉めます。それまで、帳場に座って、本を掃除したり、